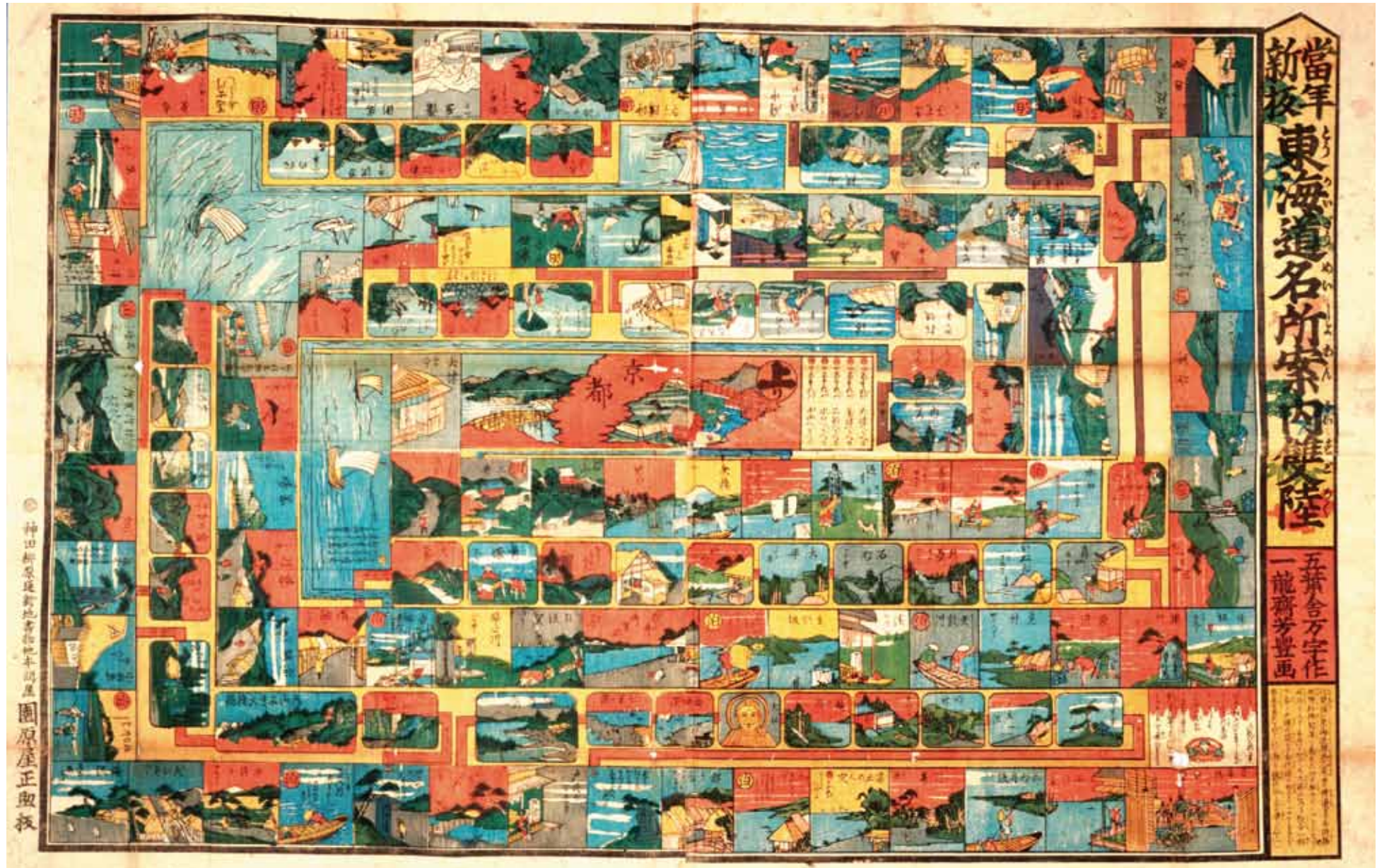




歌川芳豊(うたがわよしとよ)「当年新板 東海道名所案内双陸」文久2(1862)年

取材協力:藤沢市藤澤浮世絵館

紙とサイコロだけで「諸国漫遊」
江戸の庶民も楽しんだ正目遊び「双六」

現在、藤沢市藤澤浮世絵館で開催中の企画展・「おもしろ東海道と浮世絵双六勢ぞろい」では、江戸時代、昭和初期までのすごろくを展示している。「すごろく」には、一対一で将棋や囲碁のような遊戯盤で遊ぶ「盤すごろく」と、紙に書かれた絵の上で2人、複数人で遊ぶ「絵すごろく」の2種類が存在し、現在一般的なのは後者(以下、すごろく=絵すごろく)。

その元祖は、仏教の教えを学ぶため室町時代頃から作られていた「浄土双六」と考えられているが、一般的に人気が出たのは江戸時代初期。版画技術の向上による浮世絵の普及とともに急速に庶民の間にも広まっていった。

遊ぶというより観賞用と思われる華美なものや、歌川広重、国貞ら著名な浮世絵師によるすごろくも残っている。

江戸から京都へ向かう「道中双六」が大人気

人気の図案は、浮世絵としても多く描かれた東海道五十三次。「日本橋」を振り出しに上がりマス「京都」に至る迄の名所を描いた「道中双六」をはじめ、当時流行した戯作者・十返舎一九による滑稽本「東海道中膝栗毛」の各宿場での出来事を描いたもの、宿場ごとに人気の役者見立て絵を配したものなど、同じ五十三次をテーマにしたながらも、様々なバリエーションが作られた。「藤沢」のマスに描かれているのは「江の島」や「南湖」の左

のんびり、安全に紙上でできる物見遊山

上図は、一龍斎歌川(芳豊)による「当年新板 東海道名所案内双六(すごろく)」(文久2・1862年)。道が分岐し、遠回りや近道になる「脇道」が遊戯性を高めているのが特徴で、保土ヶ谷・戸塚間からは横浜の能見堂や鎌倉の大仏、江の島などを経由して藤沢へ至る「金沢道」、藤沢と平塚の間の「四谷」(現在の四ツ谷交差点からは大山参りの道程を経て小田原に抜ける「大山道」など、東海道に限らない多くの観光名所を一堂に掲載している。

江戸時代は便利な交通手段がなく、旅には様々な危険が伴った。家に居ながらにして日本全国を巡り、憧れの地へも行けるすごろくは、人々に旅のロマンを感じさせてくれるものだったのかも知れない。

「おもしろ東海道と浮世絵双六勢ぞろい」
◆開催中～2017年1月22日(日)、10時～19時(入館は18時半迄)、月曜(祝日・振替休日の場合は翌平日)、1/1～1/3休館◆藤沢市辻堂神台2-2-2ココテラス湘南7F(辻堂駅北口徒歩5分)・P無◆入館無料◆学芸員ミニ講座「双六で楽しむ東海道の旅」①1/9(月・祝)、②1/15(日)10時半～12時・要◆◆◆
0466-33-0111 同館事務局

上記のすごろくにわかりやすい解説が入った、藤澤浮世絵館特製双六を10名様にプレゼント! 詳細1面→

金・プラチナ・ブランド品など 幅広い買取品目!

高価買取

冬の買取強化中

タバコをやめて使わなくなったブランドライター(エス・デー・デュボン、ダンヒル等)もお買い取り致します。

銀座パリス 湘南茅ヶ崎店

TEL 0467-81-4045 まずはご相談ください

茅ヶ崎市東海岸北 2-1-39 ティーズコート 1F

10時～19時 不定休 1/5より営業します!

「当年新板 東海道名所案内双陸」図解

◀「神奈川」「馬入川」などに書いてある「泊」マークは「1回休み」。他の浮世絵すごろくでも比較的に見かけることがある指示マス。

▶赤い▲とラインがあるマスに止まった際に□が出たら、脇道に入る。近道と遠回りどちらの場合もある。図は「金沢道」入口。

▶箱根の関所は所謂「振り出しに戻る」。「手形無しにて江戸へ戻る」の無情な表記が。当時の検問の厳しさの表われか。

◀「上がり」コマに最後の関門。丁度の目以外は1つは大津、2つは草津、3つは石部、4つは水口、5つは土山、と余った数に応じて戻らなくてはならない。

ふろく わかる範囲でやってみよう

ふろく	わかる範囲でやってみよう	きりとり	やまおり
のり	のり	のり	のり